東京新聞（夕刊）　1976年9月10日

毛沢東思想の歴史的意味

中嶋嶺雄

中華思想への回帰

家父長体制残して逝く

中嶋　嶺雄氏

『死』にその『生』を思う

一九三五年一月、毛沢東が長征途上の中国共産党遵義（じゅんぎ）会議で党内指導権を確立してからだけでも四十年余、二七年九月に故郷の省都・長沙で武装蜂起（秋収暴動）し農民革命への道を進んでからだとまさに半世紀、この間、毛沢東はその天恵の政治的個性と運命力とによって、この激動の時代の中国を最高指導者として生きぬき、ついに天寿を完うした。いま八億の中国民衆は、毛沢東の死という、すでに永らく予想されてはいた現実の到来がもたらした空隙のなかで、改めて毛沢東の生の意味を想わずにはいられないであろう。

このことは、良しにつけ悪しきにつけ、毛沢東中国の隣人として「毛沢東思想」のもたらす波及効果にしばしば影響されざるを得なかったわが国民にとっても、ある程度は当てはまるであろう。

では、「毛沢東思想」とはなんであったのか。この問いにたいし断定的に答えるためには時期尚早であろうが、少なくともわれわれは、毛沢東の生涯を回顧するなかで「毛沢東思想」の特質とその歴史的意味を探り出すことができよう。

農村から都市を包囲

毛沢東は、中国の伝統社会が急速な崩壊過程にあった清朝末期（一八九三年）、すでに各地で農民暴動が続発していた湖南省の農村（湘潭県韶山冲）に生まれた。列強による中国分割、義和団事変、辛亥革命とその挫折という激しい時代環境のなかで、毛沢東はやがて青年特有の社会変革への情熱に身を焦がす。長沙の師範学校を卒業し、五・四運動（一九一九年）を目撃したのち、彼はやや遅れて二十七歳でマルクス主義の洗礼を受けるが、翌一九二一年にははやくも中国共産党創立大会に参加するという急速な政治的成長を遂げた。北伐下の第一次国共合作の時期には国民党中央での工作に従事してむしろ国民党内で人気を得るが、二七年の上海クーデター後の危機的状況のなかで、秋収暴動を指導して敗北。この敗北の教訓を通じて農民運動の体験に目覚め、農山村での根拠地革命の方式を創始する。井崗山そして瑞金にソビエトをつくり、農村から都市を包囲する戦略を打ち固めていった。

以来、世紀の冒険・大長征とその後の延安解放区の時代を経て、第二次大戦後の国共内戦そして中華人民共和国の成立による中国革命の勝利にいたるまで、毛沢東の政治生活の場は一貫して農山村にあり、同時にこの過程はコミンテルンないしはスターリン路線への反逆と抵抗の過程でもあった。毛沢東の対ソ不信は、こうしてすでに中国革命の過程のなかに深く根づいていたといえよう。

文化

橋本　博英・画

『百家争鳴』から転換

そのような毛沢東であったが、建国直後には大きな自信と期待をもって訪ソし、初めてスターリンと会見した。しかし、中ソ友好同盟条約の締結にもかかわらず、毛沢東にとってこの会談は屈辱的なものであり、やがて朝鮮戦争とスターリンの死をまって、はじめて中ソ関係は束の間の改善を得たのである。この一九五四―五六年の「過渡期の総路線」の時期は、中国の内政・外交がもっとも安定した時期であったが、毛沢東はみずからそのような安定をくつがえし、急激な農業集団化へと突進してゆく。五八年の人民公社、「大躍進」政策に見られるように、生産力の上昇よりも生産関係の変革に社会発展の原動力を見出そうとする方向性は、さらに強化される。だが「大躍進」政策が大きく挫折し、党内での批判が高まるなかで、毛沢東は中国独自の社会主義路線としてみずから提起した「人民内部の矛盾」の定式を、政治的対立者を「階級の敵」として葬むるための「階級闘争」の定式にすりかえてしまった。この点で、一九五七年六月の「百家争鳴」運動から「反右派闘争」への急転換は、毛沢東政治の決定的な旋回点だったので中国社会主義の重大な岐路でもあった。

こうした内政上の旋回は同時に対外的にも反映し、六〇年代以降の中ソ対立をも規定してゆく。そのような毛沢東政治のクライマックスこそ文化大革命だった。しかし、党内闘争の大衆運動化という毛沢東政治のこの極限形態も、ついに成功せず、脱文革、林彪異変そして「批林批孔」運動、「水滸伝」批判、走資派の再出現、天安門事件へと相次いだ激動の果てに、毛沢東はいま独り逝ってしまった。しかも、江青、王洪文、姚文元らの毛沢東側近による家父長体制という負の遺産を残して。

さて、このような毛沢東の歩みを回顧しつつ「毛沢東思想」の特質を抽出するならば、まず第一に、その革命思想は土地革命・貧農革命のビジョンに基づく農民主体的革命観であることだろう。この基本的特質は、第二に、革命戦略としての根拠地革命のビジョンと包囲の戦略・戦術をもたらす。そして、第三に、「毛沢東思想」の根底には、本来なら大敗走であるべき長征を〝革命のための種蒔き〟だとし、同時に持久戦への強い執念を保持せしめた革命的オプティミズムが脈打っていた。

このような特質のゆえに「毛沢東思想」は第四に、中国革命の経験を〝実践第一主義〟的に重視する経験主義へと接続する。こうした自己中心主義は、第五に、中国文明の絶対性への自己同一化と普遍主義、つまり「中華思想」への回帰をもたらしたといえよう。かくして第六に、ソ連への異端視と反ソ主義とは、もはや必然的な帰結であった。

民衆は相対化を行う

これらの特徴をもつ「毛沢東思想」は、中国革命を導いた倫理的・道徳的基盤としても、戦後のわが国の知性に大きな影響を与えた。やがて六〇年代に入り、中ソ論争の顕在化によって社会主義の一枚岩的団結の神話が崩れはじめたとき、「毛沢東思想」の絶対性もまた検証されはじめたのである。だが、こうした波紋を投じつづけた「毛沢東思想」は、今日、はたしてわが国でどれほどの親和力をもち得るであろうか。やはり、文化大革命以来の毛沢東政治の諸現実が、「毛沢東思想」への距離を拡大してしまったといわねばなるまい。中国の民衆もまた、やがて「毛沢東思想」にたいし、自己の悠久の歴史の文脈に照らして、それにふさわしい相対化をおこなうであろう。

（東京外語大助教授、現代中国学）

毛沢東思想の歴史的意味　東京新聞夕刊-1976.09.10

現代西欧の病をみる

タピエス展　日本で初の紹介展

の画面を作り〝壁の画家〟と呼ばれ国際的に知られているが、日本でははじめてのまとまった紹介展。初期の油絵、素描から近作までの六十余点だが、ダダイズムに共鳴した初期のコラージュふう、ついでミロやクレーふうの繊細な抒情のシュール的幻想、次に〝壁〟の作品群と近作のコラージュへと、その展開ぶりがわかる。そして、注目

タピエス「色のないレリーフ」

あいまいながら反映していると

感じられぬでもない。そんな感情移入的な鑑賞や技術批評はむしろ拒否的で、ここではその無愛相な物質とその記号を生み出す制作過程そのものの意識内容が、核心であるように思われる。舞台は、少々面倒な、哲学

ことにもなる。これは、なんと

不確かで、不安定な表現性、芸術としての非自主性か。

人間の心や生き方の視覚的表現——つまり美術表現を、観念と物質（事物）の二元性に分離的にとらえ、後者の存在感を重視することからくるのだろうか。観念の過剰性が視覚造形性と分離し、その明析さを減少したことなのか。ここには、人間精神への不信感と物質信頼のアンバランスがあろう。こういう思考方向は、やがて物質存在（作品）が現実世界そのものに同一化する美術の解体を暗示するが、これに対しタピエスはどう対応するか。

私はタピエスの世界に、近代の西欧的知性に胚胎し、現代に蔓延した疾病の一つを見ている

〝色彩による諧調美と空間構成の堅固さ〟をもつ美の饗宴と書いた。例えば、現代に生き、日本の風物をこのように生の喜びと美に溢れて描き得る画家を、讃詩的、素朴派と単純に呼び切ることはできぬだろう。ぜひ、確認をしてほしい展観だ。

▼第七回樹展　吉井忠、大野五郎、糸園和三郎、寺田政明の四人。吉井の珍しいアクロポリス風景は、近景の野の花の興味が発想らしく、またそれが吉井の本領だろう。大野は近年の快調にのって、今回はややすべりすぎ、糸園は感性を覆う観念をすこし取りはらってはどうか。寺田の北国風景は、荒涼と暖かさが柔らかく交錯していて、よかった。

（寺田千塁）

▽タピエス展＝池袋西武美術館、19日まで▽美の美展＝日本橋三越、12日まで▽鈴木信太郎自選展＝銀座和光、11日まで▽第七回樹展＝銀座4ノ3あかね画廊、12日まで

黒板

アジア文化センター「ロッキード報道中間総括1」　17日午前6時30　同センター（神保町・三省堂第2ビル）報告者・井上一久氏